



神さまが
助けた人

人が死にたく
なる時

maraikajapan

和子・・・彼女の人生は 波乱万丈でした。

男性経験もなく 初めて結婚した男性に

奴隷のように扱われ 能なしめ！ とさげすまれ

11年間もの間 ただ自分が悪いから 殴られるんだ・・・

殴られるのは 自分が悪いことをしたからだ・・・と

そんな風にしか 考えることができなかったから

耐えるしかなかった・・・我慢するしかなかった・・・

11年も

そんな生活を 自分を殺してきた生活をしたため

生きる楽しさや 生きる喜び を、見失ってしまった。

顔からは 笑顔が消え・・・

表情はなくなり・・・

「恐怖」 で ころころがっばいになっていた。

弘が帰宅すると・・・いつも

「お前は何をしとったんや！！」 と、げんこつが顔に飛んでくるのだから

小さな和子の体は 吹っ飛んでしまうのだ。

「また殴られるかも・・・」 という

恐怖感から 玄関を開けるのが 怖くて仕方がないのだった。

毎日 恐怖の中で 暮らすうちに しだいに 心が病んでいき

和子の心は 少しずつ 少しずつ おかしくなり始めた。

そして とうとう……

「死ぬ」ことを のぞむようになり

「どうやって死のうか……」 と 考え始めるようになっていくのでした。

ついに 行動を起こす日が……

和子は 8歳 4歳 の子供と

一歳にならない乳飲み子を抱えて……

真っ暗な 谷底へ……

目次

1 あらすじ

2 目次

3 初めての恋愛

1章 間違えた結婚

1 結婚

2 東京での生活

3 逃亡

2章 2度目の人生

1 再出発 もう一度人生を

初めての恋愛

和子は18歳で女子高校を卒業したあと、家事手伝いをしていた。

行きたかった大学をあきらめた後 父親が 「喫茶店を持たせてやる」というので

和子もそのつもりで 喫茶専門学校へ通っていた。

和子には 兄がいて 兄嫁の親戚に 喫茶店をしている人がいるので、ということで

その店で アルバイトをさせてもらうことになった。

和子のお店のオープンに向けて 父親も 「勉強してこい」 ということになった。

喫茶専門学校を 半年ほど通い 終了した後

兄嫁の親戚の 喫茶店で アルバイトを始めることになった。

喫茶店のマスター 弘 は和子より二つ年上である。

弘は クラブで勤めていたせいもあり 客あしらいも上手で

水商売 になれている感じだった。

和子は 弘の仕事ぶりを見ながら 「 彼は私よりずっと 大人だなあ・・・」 と感じていた。

弘は 和子には とても優しく 接し 思いやりもあり 優しく扱っていた。

お店がお休みの日は 弘は 和歌山の海や

遊園地などに 遊びに連れて行ってくれた。

和子は だんだんと・・・弘の 「 大人ぶり 」 に魅力を感じていくのだった。

和子は 半年くらいの間 実家の近くで 商売をしていた群司という男性と交際が

始まっていたので そのことを 弘に話した。

その時は 「 そう 」 というだけで 特に 不快な表情を見せることはなかった。

数か月の間 和子と弘は 深い関係にはならず

普通に オーナーとアルバイト という関係が続いていた。

和子は 接客業 という仕事に興味もわき 一生懸命に働いていた。

彼女の名前は 和子 . . .

彼女は男性とデートをした経験も一度もなかった。 19歳のまじめな女の子だった。

高卒後 初めて交際した 二つ年上の人と 交際していた。

バイトに行った喫茶店の オーナーだった。

バイトをしてるうちにいつしか 親しくなり ある日

お店のそうじを終え、帰ろうとしたとき 彼が 迫ってきてソファに 押し倒された。

彼が何をしてるのか 和子には . . . 分からなかった

「 痛かった . . . 」 という経験だけが残った初夜だったのだ。

それが和子の運命を変えることになるうとは

まったく、想像など できるはずもなかった。

その経験から やく3か月後

初めて処女をささげた男性の 子供を身ごもってしまった。

彼女は無知で 妊娠が どうやってするのかも知らなかった

が 付き合い始めた男性の 求めるまま 体をゆるしていったことが こうなる
とは

彼女はあまりにも 無知だった。

彼は大人の男性で とても気がつく 優しい人だった。

和子は 初めて付き合った男性だったので、うっとりとしたようだ。

ある日・・・彼女は しばらく 生理がないことに気がついた。

母に 相談してみたら、「婦人科」に連れて行かれた。

その帰り道・・・

母は 「 おろしなさい・・・彼との結婚は 許さないから 」 と言った。

和子は・・・自分の体が どうなってしまったのか、理解できなかった。

無知な彼女は 「妊娠？」 「なんで？」 と思った・・・

自分のやったことが・・・妊娠することになるとは・・・理解できていなかったのだ。

しかし、彼女は 「 授かった命を 殺すことなんて・・・絶対にできない・・・」 と思ってしまった。

「 このまま、結婚するしかない 」 と決心した。

中絶することが・・・人として・・・してはいけない罪を犯すことになる・・・と、感じていたのだ。

和子の決心により・・・両親は・・・仕方なく・・・結婚させることになった。

父は激怒した。

何も知らない小娘を 妊娠させた男を 非難罵倒しながらも・・・

結婚させるしか・・・方法がなかったようだ。 和子を説得できなかった・・・

結婚式は 双方の身内だけで、質素に 行われた。

披露宴は 直接の身内だけを 集め とある料理屋で することになった。

と、その日・・・和子の夫になる 男側の招待した人数が

和子の方よりも少なく、彼は 機嫌を損ねたのか・・・ こう言った。

「俺は 披露宴には出えへんからな！！」と。

和子は・・・困った・・・主人公がいなかったら・・・話にならない。

和子は 彼に頼んだ、出席してほしい・・・と。

いまから 始まる・・・というとき、彼は消えて そこに いなかった・・・

和子は、この時に直感した・・・

「この結婚は・・・間違いだった・・・」と。

そう感じたと同時に

みんなの前で 「結婚の中止」 を 公表しようか・・・と迷った。

勇気が必要だった。 ドキドキしながら・・・今にも 声が出そうになっていた。

「この結婚は 取りやめにします」と のどまで 言葉がでていた・・・

と、その時 彼が戻ってきて・・・席についた・・・

和子はその気持ちを・・・公表することなく・・・終わった。

結婚式は・・・それで 終わった。

数か月ののち 和子の父が料理屋を始めるから、二人を雇う・・・ことになった。

店先で 居酒屋を和子夫婦に 任せたい・・・となった。

和子と夫の弘は その話に乗る・・・始めることになった。

弘は 商売の経験もあり 客あしらいが 上手だった。

和子は 客商売は初めてだった。

しかし、あいそはよく 店の看板となった。

奥では割烹料理を 板前さんを雇い 和子の父は

毎日 厨房の裏で 店の繁盛を 喜んでいた。

開店して間もなく、 お客さんと、和子が話していた・・・という理由で

弘は・・・ お客さんの見えないカウンター越しに

和子の足を・・・膝から下をめぐらして

蹴りを入れるのだった・・・何度も何度も・・・蹴られた。

「えっ！　なんで？　なんで 蹴るのよ？」　と言いたかったが、

お客さんたちが目の前にいるので、　言えなかった。。。。

いたくて、涙が出てきた・・・

理由のわからない 暴力に 悔し涙をこらえて お客さんたちに あいそ笑いを し続けた

悔しくても 文句を言いだせる状況ではなかったからだ。

また、和子は お店の厨房の裏にいる・・・父に話さなかった。

反対された結婚だから・・・弱音を吐くのが いやだったからだ。

お客さんの話し相手をした・・・という理由で

足を蹴られるだけでなく、 背中や腕を つねられて

和子は 青あざが・・・消える日はなかった・・・

弘はきっと 異常な 嫉妬があったのだろう・・・と、思うしかなかった。

「お前はしゃべらんと、隅っこで 立っとならばいいんや！！」 と言われた。

あるとき 近所の友達が 相談してきて

「わたしの彼を説得してほしい、 国籍の違いは

大丈夫だから、心配しなくてもいい、と説得してほしい。

私は真剣に彼と結婚したいと思っていることを 伝えてほしい・・・」

と、いうので 和子は 彼の家を訪問した。

友達の気持ちを伝え、 和子はアパートを出た。

と、その時 そこに・・・弘が立っていた。

弘は 相手の話を聞くことなく いきなり 彼を・・・

ぼこぼこに 殴り始めた。

相手から 血が飛び散り あげくの果てに相手は・・・倒れた。

和子は怖くなり・・・そのまま 夫とそのアパートを出ていった。

翌日 友達からの電話で 彼が入院したことを聞いた、重症だった。

あごの骨は 砕け 肋骨も何本か折れ、全治3か月というのだ。

彼女は和子に激怒し とんでもないことをしてくれた、と ののしった。

それ以来 彼女とは 付き合いがない。

半年もたったころ、 弘が東京へ行く・・・と言いだした。

彼の兄弟が 東京に来いと 呼んでいる・・・というのだ。

「 え、お店の居酒屋部分を任されてるし、どうするの、こっちの方は？」

「 そんなもんどうでもええわ！ 行く！ 言うたら 行くんや、わかったな！」 と。

和子は行きたくなかった・・・

毎日殴られても・・・蹴られても・・・近くに両親がいた・・・これだけで 良かった

。

父は・・・「 結婚したんやから・・・ついていくしか・・・ないやろ・・・」 と

悲しそうに 寂しそうに・・・言った。。和子はとても辛かった・・・

和子は 思い詰めていた・・・

「 いやだ・・・いきたくない・・・」 とずっと思っていた。

「 この油の中に・・・両手を入れて・・・大やけどをしたら・・・行かなくても済む

かな・・・」

和子は 厨房のフライヤーの油を じっと、見つめた。

でも、怖くて できなかった・・・

やけどが治ったら・・・どうせ、行くしかなくなる・・・し、とも思った。

和子の新婚生活など なかった・・・

結婚より先に 「妊娠」してしまったのだから。

新婚旅行にも 連れて行っては もらえなかった。

身重の体で 姑と舅に 気を使うだけの 毎日だった。

弘の両親と 同居で 小さい家に とても気を使う 生活だった。

お腹も大きくなり 出産を まじかに 控えることになった。

弘の母親（つまり 姑さん）は お腹に赤ちゃんがいるから・・・と

ご飯をたくさん食べさせた。

どんぶり鉢に 山盛りのご飯と 味噌汁と よそわれた分を

食べるしかなく・・・和子は黙って いつも 食べた・・・

姑に逆らったり、文句などを いうことはなかった・・・

そのせいで 出産前には 体重が 23キロも増え

自分の体を 持て余したほどだった・・・

いよいよ、陣痛が起き 出産が始まろうとしたとき・・・

「陣痛微弱」 のため、なかなか 赤ちゃんが 降りてこなかった・・・

陣痛促進剤 というものもあったが、 自然に産ませる・・・との

姑の判断により 陣痛が強くなるのを ただ 和子は待っていた・・・

病院へ行ったが まだまだ、産道が 開かない・・・とのことで

家に帰された。

4日間 弱い陣痛のため 和子は 辛かった・・・

とうとう・・・和子は あまりの辛さから 早く おなかの赤ちゃんを 下におろすために・

階段 を、登ったり 降りたりして・下腹に力が入るように 無茶をしたのだった。

自分勝手に 「運動」 をすることを、繰り返した。

時おり起こる 陣痛が・・・くる。 とても、辛かったが 我慢し・・・

階段の上り下りを 続けた。

和子は 限界だ・・・と感じ 姑に 病院に行きたい、と伝えた。

病院では やはり 「まだまだ」 と言われたのだった。

もう一度 家に帰るか と聞かれたが 和子は 「帰らない」と答えた。

さらに 病院の 階段の 上り下りを 始めるのだった・・・

一人ぼっちで 誰も付き添うことなく・・・

病院の 階段を 顔を しかめながら・・・

時には 痛みに うずくまりながら・・・

何十回も 階段を 登ったり・・・降りたりしたのだった・・・

「出産とは・・・こんなにも・・・辛いのか・・・」 と

感じる和子であった・・・

数時間ののち いよいよ 分娩室に入れることになった。

和子は このまま死ぬのではないかと 思うほどの 苦痛を感じた。

そして とうとう とうとう・・・やっと・・・生まれた。

出産後 一番に飛んできたのは 舅だった。

男の子だったから うれしかったのだろう・・・

舅が名前も 付けた。

5日目に退院 和子は ストレスで ほとんど 母乳が出なかった。

搾乳機で 絞り 哺乳瓶で 与えたが 乳房が 炎症を起こし

乳腺炎となり 熱も出て とても辛かった・・・乳房が鉄の塊のようで・・・痛くて辛かった・・・

絞り切れない 母乳が 乳房に残り 乳腺炎を 起こすのだそうだ。

和子の乳房は 四角く はれ上がり 心臓が二つもあるかのような

ドクン・・・ドクンという鼓動と じっとしていても 激しい痛みで 泣きたいほど、
痛かった・・・

姑はしばらくは ゆっくり 寝ているようにと 優しかった。

しかし、乳が よく出るようにと 毎日 わかめのスープを

大きな どんぶり鉢に いっぱい・・・食べさせるのだった。

出産が これほどまでに 苦痛で

退院後も 乳房の痛みで 食欲などなかったが

無理やり たくさん 食べなければいけないのと

和子は 「二度と 子供を 産まない」と 思うのであった。。。。

和子の新婚生活は・・・

甘い うっとりするものではなく・・・

苦痛の連続・・・だった・・・

ただ 赤ちゃんの顔を 見るのが・・・

せめてもの・・・救いだった・・・

弘は 恋愛時代は 優しかったものの・・・

結婚したとたんに それは 豹変したのだ。

1年もしないうちに 和子の 親が 飲食店を 出すことになり

和子夫婦にも 「手伝ってくれないか」と声がかかり

和子も 了解をしたのだった。

和子夫婦は その飲食店の 店先で 居酒屋コーナーを 担当することになった。

そのために 弘の親との 同居を やめ、 マンションをかり引っ越した。

和子は これだけでも・・・ほっとしたのだった。

しかし 開店後 弘は 暴力的になり・・・ 横暴になった・・・

居酒屋部門を引き受けた和子と 弘は 一生懸命に働いた。

しかし、弘は 和子の 店での お客とのやり取りに気に入らないことがあると

見えないところで 和子を蹴ったり、 つねったり、暴力をふるうのだった。

お客さんに愛想を 使った・・・ということでも、気に入らないのであった。

そのために 和子の体には いつも 傷と青あざが 絶えなかった・・・

和子はそのことを 一度も 両親にも誰にも 訴えたことはなかった。

「心配するから」 と思ったからだ。

数か月ののち 弘に 東京に行った 兄たちから

「上京して来い」と声がかかった。

和子は 行きたくはなかった……

それに 居酒屋を 任されていたから、無責任に やめたくなかった。

弘は 行くといって聞かなかった。

仕方なく……和子は 両親に そのことを 話した。

両親は 「夫婦だから、行くしか……ないやろ……」と だけ言った。

上京する日が迫ったころ 和子は 天ぷらを揚げる フライヤーを じっと見つめていた。

「ここに手を突っ込んだら……大やけどをするだろう……」と思った。

「大やけどをしたら……東京にはいかなくて済むだろう……」と。

今にも 手を 入れようとした 瞬間……

爆発音が 起こった……和子は2メートルほど 後ろに吹っ飛んだのだ。 ええっ???
なに???

ガス漏れで 引火して 爆発したのだ。

火事には ならなかったが、かなりの風圧で そこのものが 飛び散ったほどだった。

和子は思った……

「油に 手を 入れるな・・・」と、神さまが 止めたのかも・・・と。

結局 和子は 一人息子と 弘と ともに 東京に 行くことになった。

付いていくしかない・・・という判断しか・・・和子にはできなかった。

ほかの方法は・・・あたまにはかすりもしなかったのだ・・・

別れる・・・とか、別居する・・・とかの ほかの手段は

和子の頭の中には 全く浮かんでくることはなかったのだ・・・

なぜか・・・夫婦と子供で・・・一緒に生きる・・・ということしか

頭にはなかったのだ・・・

つらい 別れののち 和子の新生活が 東京で始まった。

彼は仕事を探し 兄の紹介で 現場の仕事に落ち着いた。

和子は まだ1歳に ならない息子と アパートで 育児の毎日だった。

東京での生活も 2年ほどになり 慣れてきた。

友達と言える人はできなかった。

アパートの 住人と大家さんくらいだった。

弘は 乱暴な性格が 以前と同じだった。

帰って来て 雑巾が同じ場所にあると 「お前は ちゃんと掃除を してるのか！」

と、殴られるのだった。 和子は よく・・・ 殴られた・・・

夫が帰ってきたとき 留守にしていたら

「俺が帰ってきたのに、お前はどこを ほっつき歩いてるんや！」 と、

顔以外の頭や体を げんこつで殴る・・・1回や 2回じゃなく 何度も何度も 繰り返
し 殴った。

顔を殴ると 目立つので 見えないところを 殴るのだった。。。。

なにか、気に入らないことがあると・・・殴るのだった。 八つ当たり？ という
のか・・・

手で殴ると 自分の手がいたいから・・・と、いう。 あるときは

剣道の 木刀を 持ちだして 殴るのだった。

「 やめて！！ 」 といっても、

「 俺に殴らせようにしてるのは お前や、お前が悪いんや！」 と言われた。

和子は 悔しくて 悔しくて・・・悲しかった・・・

木刀で殴られた後は・・・

お尻や背中が ザク口のような 赤黒い皮膚になり・・・

3倍くらいに腫れ上がり・・・パンパンで カチカチになってしまうのだ・・・

なぜ 自分をこんなに 粗末にするのか、動物のように・・・殴るのか・・・

なぜ？ こんなことをするのか・・・

と、同時に・・・次にはこんな感情が出てくるのだった・・・「 憎い・・・」
と。

そのため 和子は 夫が家にいる間中・・・

恐怖と緊張で いっぱいだった・・・

神経が 張りつめ、いつどんなことで・・・また殴られるか・・・こわかった。

「でも、殴られる原因を作ったのは自分だから・・・

彼の気に入らないことをした・・・自分が悪いのだ・・・」

「 彼を怒らせたのは・・・わたしだ・・・何をして怒らせたんだろうか・・・」

と、自分を責めはじめるのだった。。。。。

和子の顔からは 笑顔は消え去り・・・幸せなどは・・・感じなかった。

この4年間の間に 2人目の女の子を 出産した。

里帰りなどはさせてもらえず、たった一人で 病院へ行き

産室にいても 一度は様子を見に来たが

「俺は仕事があるから 行く」と言って出て行ってしまった。

赤ちゃんを 産むときも一人ぼっち・・・だった。 産みの苦痛を 一人で頑張った・・・

今回の出産も 初産と同じように 陣痛微弱・・・ということで

生まれるまでの間 3日間もかかり、一人で 病院で過ごした。

妊娠してしまったから、「生むしかない・・・中絶はできない・・・」と思ったのだ。

時は過ぎ 7年目を迎えようとしていたころ。

弘は相も変わらず 気に入らないことがあると 暴力を繰り返した。

あるときは 下の女の子が、殴り始めた夫に向かって

「パパ、 やめて！ ママが死ぬ！！ やめて！」 と 泣きながら叫んだことがあった

それでもやめないのだから 娘は テーブルの下に隠れて 泣いていた。

翌日 ザクロのように はれ上がった 和子の体を

娘はさすりながら 泣いていた。

「 ママ かわいそう・・・ 」 と。

そんなことの繰り返しの日々が続いた。 まだまだ 何年も ずっと・・・続いた。

和子の顔からは 笑顔などは消え・・・表情もなくなり・・・

廃人のように・・・ただ 毎日を 生きてるだけ・・・のようだった。

そんな毎日が続くころ

生活費を きちんと入れなくなってきた。

東京での生活に慣れ 3年も過ぎようとしたころだった。

和子は夫が仕事を休んでることには 気がつかなかった。

収入が減ってきた・・・ことは気づいたが、それほど極端でもなかったからだ。

あるとき 大家さんが 来て 「 家賃が滞納してる 」 と言ってきたのだ。

その時初めて 家賃を何か月か 支払っていないことが分かった。

というのは 弘は食費以外は 和子には渡さなかったからだ。

家賃滞納を 夫に言うと・・・

「家賃を 待ってもらえ！」 と言った。

和子は 言われた通りに 大家さんに頼みに行った。

6 か月も滞納したので 大家さんは怒り出すので

和子は バイトを探し パートに出かけることにした。

ひとさまに迷惑をかけたらいけないから・・・と思ったのだ。

西友というスーパーの裏にある 喫茶店で バイトを始めることにした。

ある日 弘の会社からの電話で

夫が 仕事を ちくちく 休んでいることが わかった。

現場監督からの電話で 「 今日も休みか? 」 と聞くのだ。

和子は 知らなかった。そんなに休んでいることを・・・

現場の仕事だから 雨などで 給料の少ない日も あるのだろうと 思っていた。

しかし、弘のそれはエスカレートし 行かない日の方が 多くなった。

が、 家には ちっとも 帰ってこなかった。

ある日 パートから 帰った和子は すでに家にいた夫に驚き、サーッと緊張が走った。

ゾーッとし、血の気が引いていった・・・

玄関を開けるなり・・・大きな体の弘の・・・ 大きな手が 飛んでくるのであった・・・

和子は 吹っ飛び ひっくりかえってしまった。

「だって、家賃を 払わないと・・・」 というやいなや

「お前に働け って 頼んだか！！」 と、なぐる、ける・・・なぐる・・・ける・・・
なぐる・・・ける・・・

髪をつかまれ 引きづり回され ギャーと騒ぐと

黙れー！！ とのどを絞められ 、グッところえた。 涙が・・・出た・・・

このときほど、怖かったことはなかった・・・

まるで、 憎たらしい仇を 捕まえて 痛めつけているような・・・拷問のような・・・

恐ろしい形相をして・・・暴力をふるい・・・

小さな彼女を・・・痛めつけるのだった。 和子は46キロほどしかなかった。

首を絞められて 失神したこともあった・・・

和子は 暴力が こわかった・・・

親にも殴られたことがなかった・・・

・・・しかも、素手ではなく

木刀で 殴られ続けることに 少しずつ・・・「 恨み 」 が 募ってきた。

3人目が生まれるころ 夫は ほとんど 家には帰らなくなり

和子は苦しい夜を お酒で 眠るようになった。

この時 3人目を妊娠中で・・・アルコールを飲むことを

良くないと わかりつつ・・・苦しくて 眠ることができなかったのだ。

和子のころには いろんな思いがあった・・・

「わたしは・・・なんで、生まれてきたのだろう・・・

わたしは・・・なんで、こんな男と生きてるのだろう・・・

わたしは・・・なんで、こんなに苦しい目に合うんだろう・・・

神さまは なんで、わたしを こんな目に合わせるのだろう・・・

なぜ・・・生きなければいけないのだろう・・・

なんのために・・・だれのために・・・いつまで・・・

こんな人生を がまんするんだろう・・・」 と。

ある夜 和子は いつものように 眠れないので

アルコールを飲むのをやめて 街を フラッと 歩くことにした・・・

別に弘を探しに出たわけじゃなかった。 が・・・

ふと見ると 弘の車が 道路に止まっていた・・・

弘は酒は飲めないが スナックの雰囲気が好きだといっていた。

和子は その近くにあった 営業しているスナックに 入ってみた・・・

大きなおなかを 抱えて スナックの ドアを開けた・・・

夫が・・・いた・・・そこにいたのだ・・・

膝の上に 女性を 座らせていた・・・

「そうか・・・ここで・・・あそんでたのか・・・」

和子を見た夫は 何の弁解もなく・・・

「 帰れ！！ 」 と言った。

次の日の朝 夫は帰ってきた。

「あのな、彼女はな 才女なんや。 お前とはレベルが違う。

あの人と 商売をするから おれのパートナーや、誤解するな。」 とだけ いった。

ばかな和子は また その話をうのみにした・・・

「そうなのか・・・」 と 思ってしまった・・・

その話が・・・うそだとは・・・思わなかったのだ。

しかし、それからというもの 夫は 事あるごとに

和子を 「能無し女！ 役立たず！ 」 と ののしった。

なんども、お膳を ひっくり返し

「こんな料理しか 作れないお前は ほんとに 能なし女やな！！えらい違いや！！」

と、 たびたび、 ののしられるので

和子は 「わたしは、そんなに 能なし女なのか・・・無能な女なのか・・・」

と、思うように・・・なっていた。

「生きていてもしょうがない・・・生きる価値もない女か・・・」 と言われた。

「 そうか・・・わたしは それほど能無し人間か・・・そうだったのか・・・」

という思いが ころころの大半を占めていった・・・

和子は もともとは 自分を殺すような性格ではなかった・・・

明るい 親思いの 素直でまじめな 女の子だった。

弘と暮らすようになり 暴力の怖さから 殴られまい・・・とだけ した。

あるときは 裸にされ ベランダに 放り出されたことがあった。

おもちゃをもてあそぶように 笑っている弘だった。

この時和子は 「 この人は・・・頭がおかしいのでは・・・？ 」 と思ったことがあった。

こんな日々が 延々と 続く毎日だった。。。。

和子は 次第に 自分を見失い 自分という人間の存在が わからなくなっていた。

そんな中、 3人目の男の子も どうにか、無事に 出産したのである。

当然のように 一人で 歩いて病院に行き

たった一人で 出産したのである。

やはり 陣痛微弱・・・で この時も 病院の階段を 何時間も

登ったり 降りたりして 陣痛 を 強くするために がんばったのである。

産後の休養などはなく 5日目に退院してからは

いつも通りの 生活が 続くだけであった。

3人目が生まれたら 弘は 変わってくれるかも・・・という

かすかな期待をしていた和子だったが・・・

そんなことは なかった。 かえって エスカレーターしただけであった。

和子が心配したことがひとつだけあった。

3人目が お腹に入っているときに しょっちゅう お酒を 飲んだことである。

眠りたくて アルコールの力を借りていたが

「この子に 悪い影響が・・・あるかもしれない・・・」 と 感じていたのだ。

しかし、男の赤ちゃんは 無事に生まれてくれたのだ。

ただ、重症のアトピーだった。。。。

4か月ごろには はっきりとアトピーが出てきて いわゆるアトピー性皮膚炎 だった。

かゆくて 赤ちゃんは そこらじゅうをかきむしるので

木綿の赤ちゃん手袋をいつもしていたけど その手袋まで

血がしみて 真っ赤に なるほどだった。

時には 夜泣きがひどく 泣き止まないこともあり

そんな時 和子は 赤ちゃんを連れて 外に出た。

弘が 怒鳴りまくり 「寝られへんやないか！！ だまらせろ！！」 と、 怒るからであった。

そんな毎日の中 和子は 子供たちだけを支えに

子供たちの顔を見ては 「この子らのために・・・我慢しよう・・・」 と

そう考えるのだった。

弘は 付き合っている 芸者と深入りしていき

もう、仕事の関係だけではない・・・ことも 和子には 分かっていた。

あるとき・・・

弘が 用意した食事の膳を ひっくり返し

「お前の頭は カラか！ 脳みそがあるんか！

毎日 おんなじことしか できないんか！ なんやこれは！

これが 食べるものか！！！」

そのあと・・・ 木刀を持ってきて・・・

和子を 殴り始めるのだった。

「 痛い！ やめて！！ 」 と、叫ぶ和子に

「 お前が悪いんや！」

「 殴られるようにしてるのはお前や！！」 と 怒鳴った。

次の日、 幼子をふたり 連れて 1年にならない赤ちゃんを抱っこし・・・

手ぶらで 家を出た・・・ あてもなく・・・ 電車に乗った。

だれもいないところに行きたかった・・・山奥に出かけた・・・

ついたところは福島県だった。

「 もう・・・いい・・・これ以上・・・むり・・・

わたしなど、生きていても しょうがない人間や・・・

ちっとも 幸せになんか なれない・・・

こんな殴られるだけの・・・人生なら・・・もう・・・いや・・・

幸せになれないなら・・・生きていてもしょうがない・・・

これ以上・・・もう・・・うんざりや・・・」 と。

両親の言った ことを思い出した。

「あの男はあかん・・・兄弟たちも皆 暴力的な奴らや・・・」 と言っていた。

披露宴の日に 感じた

「この結婚・・・失敗した・・・」 が当たっていた・・・と。

「私は 殴られるために・・・生まれてきたんじゃない・・・」 と、泣きながら

真っ暗な山道を歩いていた・・・

崖は どこにあるだろう・・・と、さまよっていた・・・

息子と、娘の手を握り・・・ 「ごめんね、悪いママで・・・」 と 謝った・・・

とうとう 崖を見つけた。

下を覗くと・・・まっくらで 何も見えない・・・

ここから 飛んだら・・・間違いなく死ねるだろう・・・と思った。

その場で うずくまり 和子は 何時間かを過ごした。

もう死ぬんだ・・・と 思ったから

今までの人生のすべてを振り返り 思い出していた・・・

小さいころ 少女期のころ 学生のころ・・・

ずっと、ずっと 幸せだった・・・

彼と結婚してから・・・苦しみが始まった・・・

自分が無知な故に・・・世間知らずな故・・・

ただ、我慢することしか できなかった自分のことを

無能で 役立たずで 生きるに値しない人間だ・・・と

弘との 11年間の 結婚生活が 恨めしかった・・・

これ以上・・・苦しみたくない

これ以上・・・殴られたくない

これ以上・・・心をズタズタにされたくない

「私は生きてるんや 人間や 幸せになりたいんや・・・」 と

心の中で 叫び続けていた。 涙がとめどなく・・・落ちてきた・・・

抱っこバンドで抱いてる赤ちゃんと 長男と長女の手をぎゅっうと 握りしめた・・・

「 ああ、 もうこれで 楽になれる・・・

お父ちゃん、お母ちゃん、ごめんなさい・・・

親不孝な娘を・・・許してください・・・」 と声に出した・・・

身を乗り出そうとした・・・覗き込むと

そこは・・・真っ暗で 何も見えない 地獄のようだった・・・

「 まちがいなく死ねる・・・」 と和子は思った。

なるべく遠くへ・・・飛ばう・・・と、体をもっと 乗り出した。

すると・・・

和子の視界に入ってきたものがあった・・・

光である・・・小さな光が 和子に見えた・・・

ずっと、その光を 追っていると・・・目の前にまで 上がってきた・・・

その光は 目の前で 大きく膨らみ・・・

その光の中に・・・両親の顔が・・・見えた・・・

両親の顔・・・が・・・

2人が じっと・・・和子を見ていた。 悲しそうに和子を見ていた・・・

和子は 両親の顔を見ながら・・・思った。

わたしが死んだら・・・

この両親は・・・どんなに・・・泣くだろうか・・・と。

無言の両親は ただ悲しそうに 和子を見るだけだった・・・

和子もしばらく・・・その顔を見ていた・・・

「お父ちゃんと お母ちゃんが・・・泣いている・・・死ぬのをやめよう・・・」

子供たちの手を引き 来た道を 戻ることにした。

しかし、どこをどう歩いてきたのか・・・もう わからなくなっていた。

しばらく歩いていると

すると・・・なぜかむこうの方に

むこうの方に 灯り・・・が見えた。

灯りの方に行ってみると・・・宿だった。

そこで一泊止めてもらうことにした。

息子が 「 ママ ここは気持ち悪いよ・・・かえろう・・・」 というので

「 ウン、明日 帰ろうね・・・」 と答えた。

和子は ずっと、泣きあかし、一睡も 眠らないまま 朝が来た。

この夜 和子の心の中に・・・

覚悟・・・が できた・・・

「 生きるんや 」 という 覚悟が あった。

「死ぬより・・・生きよう・・・」と・・・決めた。

そうや やり直せばいいんや・・・

あんな男からはおさらばや・・・

縁を切ろう・・・

こう決めるまでに・・・11年もかかったのである・・・

和子にとっては 長く 苦しい 地獄のような・・・

11年間だったのである。

翌日の朝早く 和子は 東京行きの電車に乗った。

家に帰ったら、弘は すでに いた。

この時の和子には 「 恐怖 」 は もうなかった……

「 大阪に帰る。 」 と 目の前にいる 弘に言った。

夫は 「 なんやとー!!! 」 と 激怒し

だっと立ち上がり、 刀を 持ってきて 抜いた。

「おまえ！ 大阪へ帰るといのか！ 俺に殺されたいんか！！」 と 大声で

血走った恐ろしい目つきだ。

この時の弘の顔は 見たことのないほどの 鬼のような形相だった

この顔を見たとき……和子は……

「 昨日は死ななかつたけど……

今日は死ぬかもしれない…… 」 と 思った。

刀 を 抜き 和子に 向かって 振り上げた。

鬼の形相で

真っ赤な顔で

刀を手に

大声を張り上げ

刀を 振り上げたとき

和子は 「 殺されるな 」 と、覚悟した。

「 殺すなら 殺せ !! 」 と 和子は 怒鳴った

初めて 結婚以来 この時に初めて

弘に 大声を 張り上げた。。。。

すると 彼は いっそう 刀を 振り上げた。

和子は 「 殺される . . . 」 と 覚悟を決めた

「 わたしの人生はここで 終わるのか まあい 」 と、腹をくくった

痛いとか 怖い とか この時は感じなかった。

和子は 静かに 目を閉じた

この瞬間 再び 目の奥に 両親の顔が 見えた。

「お父ちゃん お母ちゃん ごめんね」 と 心の中で 呟いた

次の瞬間 風がひゅっと 耳の横を 通り過ぎた

刀は・・・ドスッ・・・と 後ろのタンスに刺さった。

和子の顔から・・・ほんの3センチほどが・・・ずれていた・・・

その場ですぐに・・・

和子は 大阪の実家に電話をした・・・

弘の目の前で・・・

「 お父ちゃん・・・わたし・・・帰る・・・ 」 とだけ言った。

「・・・そうか・・・わかった・・・」 という返事が 和子に聞こえた。

父は 和子が我慢強い娘だと わかっていた。

その娘が そういうなら・・・よほどのことだ・・・ということを理解していたようだ。

だから、引き留めようとは・・・しなかった・・・。

あとから聞いた話があった。

両親は 和子が幸せではなかったこと・・・

暴力で いつも からだに 青あざがあったこと・・・

決して幸せでなかったこと・・・

和子は 忍耐強い子だったから ずっと ずっと

耐えていたことを 知っていたのだ・・・

娘は苦勞している。

娘は大男から 暴力をしょっちゅう受けている。

長袖を着て 隠しても その袖の下には

青あざがいつも見えてるのに、何も 愚痴をこぼさないのか。

「辛い」 と、言わないのか。

両親はそんなことを 思いながら

だまって 見守っていたのだった。

和子がそれを聞いたのは ずっと なん年もあとのことで

弘から逃げ出してきて 落ち着いたあとのことだった。

「実はね・・・全部知ってたんよ・・・

あんたが 苦勞して 痛めつけられてることも、全部ね。

娘が痛めつけられてて 心が痛まない親がどこにいてる？」 と

母親が・・・言った。

「なんという、親不孝を・・・していたんだろう・・・

どれほど 親を 苦しめてきたんだろう・・・

心配かけまいと 何も言わなかったのに・・・

全部 バレていたとは・・・ 」 と

ここから・・・申し訳なく 思った。

それから 和子は 夫のいない間に 子供学校には手続きを済ませ

職場にも 制服を返し 挨拶を済ませ・・・東京から 逃亡した。

3人の子供を 連れて たった一つだけ 持って出たのは・・・

二十歳の時に 父からもらった・・・ミンクのコート・・・それだけを持って出た。

新幹線に 乗り込んだ。

和子が 東京で 耐えていた年月は 11年間だった。

3人の子供を 夫との間に 生んだ子たちであった。

子供ができれば いつか 自分を取り戻してくれるだろうか・・・と

もっと、家族を大事にしてくれるかもしれない・・・との

願いをこめて生んだのが 3人である。

2人は 東京で 出産した。

言うまでもなく

東京では たった一人で

病院に歩いていき

たった一人で 出産したのである。

歩いて行き、歩いて 帰ってきたのである。

和子の出産 は いつも微弱陣痛・・・らしく

陣痛が始まってから・・・3～4日 かかるのであった。

和子は もう二度と・・・子供は産まない・・・と決心したにもかかわらず 3人も生んだのだ。

痛くて 辛くて いくら頑張っても・・・子宮口が開かず・・・

看護婦さんは 「 まだまだよ～」 といって 去った。

和子は 長居すれば 費用もかさむと心配し

陣痛のさなかに ベッドを離れ

病院の 階段を 5階 まで 上がったり 降りたりして

陣痛を・・・強くしようと頑張ったのだ。

「赤ちゃんが 下に降りればいい・・・」 と思ったのである。

おかげで 3人目の赤ちゃんは・・・へその緒が 首に 何十にも巻き付いていたらしい。

和子は 大阪行きの 新幹線の中で

今までの人生を 振り返り・・・涙が ボロボロ・・・出るのだった。

長男8歳 と長女4歳 は・・・黙って・・・座っていた・・・

一言も母親に 話しかけることはなかった。

抱いていた三番目の男の子は・・・1歳になったばかり・・・だ。

外の景色を 眺めながら・・・とめどなく流れる・・・涙を・・・

拭うことなく・・・じっと・・・窓の外を見た・・・

辛く 苦しい・・・11年間だった・・・と。

いい思い出 は 何一つも・・・なかった・・・。

思い出されるのは・・・

ただ 殴られ続けた・・・11年間のこと・・・

和子の心の中には・・・もう・・・夫への・・・愛などは・・・とっくに消えていて

かけらも残っていなかった・・・

「これで 解放された

もう、怯えて生きることはない」 と

和子は 自分の人生にひと区切りがついたと感じていた。

これから どうする とか、

どこで寝る とか

どうやって生きていく とか そんなことは

何の心配もしていなかった

そういうことは 和子にとっては

とるに足りないささいなことだった

ここまでの行動をとるために

要した時間は 11年だったのだ

我慢強いのは 良し悪しだ

してもいい我慢としなくてもいい我慢があることすら

頭の回らない和子には 考えも及ばなかったのだ。

高校卒業して すぐに 妊娠してしまったし

世間も知らないうちに 母親となり

家庭を持ったからには 良妻賢母にならなければ・・・と

母たるもの 家庭を 壊してはいけない・・・

などと、思っていたのだ。

自分の身の上を起こる 辛い出来事

死にたくなるほどの心の傷

我慢しても、 どんなに耐えても

いつか 良くなる・・・

この後には幸せがやってくる・・・

と 考えてきた和子だが

しかし・・・

それは 違うのだ・・・ということに

この11年間の間には わからなかったのだ。

大阪に着いた 和子と子供たちは

真っ先に 実家に 両親に会いに行った。

両親は 喜んでいて・・・帰ってきたことを喜んだのではなく

元気な顔が見れたことを・・・喜んだのである。

普通なら・・・普通の親なら・・・逃げて帰ってきた娘の 家や生活を

確保するだろう・・・

しかし、和子の父親は 厳しい人だった。

「お前が 好きで 結婚して 好きで 戻ってきた。

親の元に 帰ろうやなんて・・・思っていないやろうな？

自分のことは自分でやれ・・・」 と、援助しないことを宣言した。

「はい、自分で 頑張りって生きてます 」 と答えた。

それからというもの・・・

和子は 昼はバイト 夜はスナックでバイト・・・

一日中働いた・・・

和子は 3人の子供を養うために・・・身を粉なにして 働いた・・・

32歳の和子は まだまだ美しく・・・男性からの誘いも多かった・・・

この年頃の女は 女ざかりでもあり

もてたことなどなかった和子には 男が群がり

みんなが誘いをかけてきた。

地獄から 抜け出した和子には 何もかもが・・・新しかった。

あるときなどは・・・デートで 遅くなり

朝帰りをしたことが・・・あった・・・

家についたとき 長男が 怒っていた・・・

「 ママ！ 今日には ○○ちゃんの遠足なんやで！！ 」 と

彼がお弁当を 作ってリュックサックに 入れていたのだった・・・

和子は・・・ガーンと・・・頭を打たれた・・・

「 なんという母親だろう！！ わたしって 最低だ！！ 」

あの時の・・・長男の気持ちは・・・

どれほどのものだっただろう・・・と、痛感した・・・

「 ダメな母親だ・・・わたしって・・・」 恥ずかしかった・・・

このことが長男の心に深く 傷をつけたことに・・・

取り返しがつかなくなることは・・・想像などできなかった。

そんなこともありながら 4人家族は 無事に過ごしていた。

和子はよく 朝帰りもしていた。

決まったBFもいた。しかし プレイガールになることはなかった。

ただ、朝も昼も夜も 働いていたので・・・

3人の子供は いつも ほったらかしにされていた。

彼ら3人は このせいで 兄弟の絆が 深まっていたようだ。

3年半も過ぎたころ・・・

東京の父親から 連絡があり・・・

「子供たちを迎えに行く」といつてきた。

長男が 12歳になるころ つまり中学校に 上がる時期だった。

「子供は渡さない」と言い切った。

一か月もしないうちに 彼は やってきた。

久しぶりの父親の顔を見たときの・・・

長男と長女の顔は・・・うれしそうだった・・・

彼は 「子供らに直接 気持ちを聞くから」と、

子供たちを連れて 出ていった。

しばらくして帰ってきたとき

長男は・・・和子に・・・

「 ぼく・・・お父さんと東京に行く・・・」 という。

息子が・・・こう言ったことを・・・和子は

ショック・・・というより・・・

「 それほど、寂しかったのか・・・」 という自分への責めが わいたのだ。

この子が いつも下の子二人の面倒を見て来て・・・

母親がいない間も しっかり、3人は きずなを深めていたこと・・・

「 こんな暮らしはもう嫌だ・・・」 と 感じていたんだろう・・・ことが。

東京へ行く・・・と言ったのは 長男ひとりだったが・・・

「 お兄ちゃんに行く・・・」 と、下の二人ともが・・・言った・・・

和子は・・・どうしたらいいのか・・・苦しんだ・・・

実家に行き相談すると

「 末っ子だけでも 離すな 」 という。

和子もせめて・・・一人だけでも・・・と 思った。

東京に戻るその日に

末っ子の息子を 連れて 出よう・・・としたその時

「 ママ ぼくも お兄ちゃんに行く・・・」 と言ったのだ・・・

和子は・・・その子の顔をじっと見つめ

「この子を　いま引き離したら・・・

一生・・・兄弟を思って　泣くだらう・・・」　と　思った。

そしたら　和子は　ずっと、　この子に罪を残すだらう・・・と感じた。

「　そう・・・私が我慢すればいい・・・

わたしだけが泣けばいい・・・この子たちを・・・

引き裂いたら・・・彼らの人生に取り返しがつかなくなるかもしれない・・・」

和子は・・・あきらめた・・・

和子は　子供たちを　邪魔だとか、

次の結婚に　差し支える　とか

そんなことは　脳裏をよぎることもなかった。

ただ、子供たち3人を・・・

引き裂くことは・・・どういふことになるか・・・

兄弟が　兄弟を恋しがり・・・まっすぐに

育つだらうか・・・ということだけが気になったのだ。

「 ママ 電話するよ！ 毎日ね！」 と、

3人は・・・うれしそうに・・・父と・・・出かけていった・・・

子供たちが 行ってしまったあと・・・

和子は一人ぼっちになり・・・

なんとも、耐えがたい・・・虚しさで心が・・・消えてしまったようになった。

和子は 再び・・・力が抜けた・・・

一晩中泣いても・・・泣いても・・・

まぶたが 腫れて 目が開かなくなっても

まだ 涙が止まらなかった・・・

子供たちの 荷物のひとつひとつが・・・

和子の心に突き刺さり・・・

「 悪い母親だったんだ・・・」 と・・・自分を後悔した、責めた。

長男が 私といることより・・・

東京の父と 行くことを選んだ・・・

それほど、私との生活が 寂しかったのか・・・辛かったのか・・・

どちらにせよ

彼らは・・・行ってしまった・・・もうここにはいない・・・

一緒に暮らした3年半は 初めから なかったかのように・・・感じるのだった

3日ほど、泣き続け・・・まぶたが 腫れあがり

目が 開かなくなっていた。

頭痛がひどく 体が重く 体調が みるみる 悪くなっていった。

健康だけが取り柄だった和子が

まるで病人のように・・・弱弱しくなった・・・廃人のようになった・・・

見かねた 妹が 彼女が 長年かかっている 「 鍼灸師 」 を

紹介して 連れて行ったのだ。

「 お姉ちゃんは 気力が 無くなっています、なんとかしてあげてほしい 」 と

頼んだそうである。

ところが 和子を見た その鍼灸師は

和子に一目ぼれをしてしまった。

数か月間 鍼灸師に 治療をしてもらってるうちに

体調は回復していき 少しずつ 元気を取り戻していった。

子供たちは ほとんど毎日 電話をしてくれた。

3か月ほど過ぎた ある日 長男から

「 ママ、 もう二度と電話をせんといて！」 と 言われてしまった。

和子は 翌日 東京へすっとなだ。

「 なんで、急に そんなこと言うの？」 と 直接に聞いたかったからだ。

長男は和子の顔を見ると トイレに隠れ

「 自分の胸に聞いてみたらわかるやろ！

僕らのことが邪魔なんやから にどと 来ないでくれ！」 と・・・・・・・・

この言葉を聞いて・・・・・・・・すべてを悟った。

「 お前の母親は 結婚するために お前らを捨てたんや」 と

教え込んだ人がいる。 と。

その人が つまり、 弘の愛した 「 芸者 」 その人だ。

弘はその人と籍を入れてはいない。

つまり婚姻関係にはない。

しかし、のちに 子供たちを 養子縁組し 自分の子供にしている。

「 ああ、彼女の目的はこれだったのか・・・」 と、

すべては計画的に 彼女の 思惑通りに 動いていたのだ・・・とわかった。

長男に そう言われて以来 もう・・・24年間も会ってはいない・・・

和子は 一切 子供たちと会ってはいない。。。。

彼らからも 会いたいとの声もなかった。

和子は勝手に 思っていた。

養子縁組してくれた 女性に対して

裏切り行為をしてはいけない・・・と、 思ってるのだと。。。。。

和子の夢に出てくるのは 別れたときのままの

長男12歳 長女8歳 次男4歳 の ままだ。

和子は 誤解されてることを 釈明しよう・・・とは思わなかった。

子供が そう思うなら・・・しかたない・・・

事実そうじゃない・・・が

自分が結婚したくて 子供が邪魔で・・・捨てた・・・と

教え込まれたなら・・・

それを信じたのだから・・・それも仕方ない・・・

十数年後 別れた弘から

和子の携帯に 電話があった。(正確にはSMSである)

息子が結婚するから 「お前も親なら 祝い金でもやれよ」と。

「そうやね、じゃあ、長男から そのことを聞きたいから 電話さして」と言った。

「その必要はない、俺から渡すから 俺に送れ」と言うので

和子は・・・断った。

弘は 「お前は それでも母親か！」と 捨て台詞を言い 切られた。

正しかったのか どうかは知らない。

息子の結婚に 祝いもしない ろくでもない母親・・・かもしれない。

別れて以来 一度も 会ってない。

あれっきり 言葉も交わしたこともない。

きっと、恨んでいるのだろう・・・と そう・・・思う。

再び 弘から 何年か後に 電話があった。

長男が テレビに出たり 歌舞伎役者と 親友だとか・・・自慢気に言った。

「お前は 子供に会いたくはないのか？」 と聞く。

「会いたくない母親がどこにいるのか？」

我が子に会いたい・・・と思っても

そのことで子供に 迷惑がかかるなら 会わなくてもいい・・・ と言った。

育ての親に義理を感じてるいるから

産みの親には会わない と、決めている子に対して

私が なぜ、思い煩わせるようなことができる？ と答えた。

そして、付けくわえた。

「もし、 彼らの方から 私に会いたい・・・と言うなら

私はいつでも どこにでも飛んでいくよ。」 と。

自分たちを捨てた母親になんか 会いたくもない・・・と

思ってるかもしれない・・・のに。

「そうじゃないんだよ 」 と、今さら弁解して どうなるの・・・

その鍼灸師と 和子は再婚した。

「 結婚はしない 」 と、言い張ったのだが

お母さんが亡くなる前に 遺言で 和子に頼んでいった……

「 この子と 結婚してやってくれ……たのむ……」 と。

和子は 一人ぼっちになったし

子供たちとも もう、暮らせる当てもなく

なるようになれ……と、流れのままに身を任せた。

もう失うものはない……

自分が持っていたもの……すべてなくした……

これ以上何を失うというのか……

こんな自分でも 必要だと いう人がいるなら

「どうぞ」 と、自分を差し出すことにした。

和子のこの再婚は これまた……

盲人の舅の介護で 13年間……奉仕を続けた。

認知が始まり 5年間ほどは……確かに苦勞した、ともいえるかもしれない

が、和子にとっては この程度は

昔の地獄の人生とは 比にもならなかった……

こんなこと……苦勞でもなんでもないと……思うのだった。

人間一度 地獄まで行くと

肝が据わる といえばいいのか

怖いものがなくなる といえばいいのか

すべてが大したことじゃない と感じるものだ。

このあと、 和子の人生は

まだまだ、波乱万丈なことがやってくるのであった

人生 . . . 波乱万丈

命があって

生きていられて

死ぬことを 止められて

「 まだまだ 死ぬ時期じゃない 」 と

神さまに言われてるような気がして

まだ、和子には 「 修行 」 が あるのか

まだ、気づいてないことがあるのか

まだ、清算すべきことがあるのか

今ここへきて 和子は思う・・・・・・・・

「わたしの人生で 一体 どうなってるんだろうか・・・・・・・・

私は どんな悪いことをしてきたので・・・・・・・・

なんども、これほど 辛いことが起こるのだろう・・・・・・・・

私のどこが間違っているんだろうか・・・・・・・・

どうしたらいいのか・・・・・・・・誰か・・・・・・・・教えてほしい・・・・・・・・

私の道に 光を与えてほしい・・・・・・・・」 と。

振り返って

子供たちと別れて 今年で 24年である。

別れの日 長男が 和子に送った 「白ワイン」 を

和子は いつも ベッドの横に 置いている。

そのワインを 手に取り 24年前のこと 思い出す。

つい最近 次男の顔を FACEBOOKで 偶然に見つけてしまった・・・

彼はすっかり 大人になっていて・・・

4歳のころの 和子の心にあった彼とは もう 違っていた・・・

アトピーがひどくて かきむしり からだ中に 血がついていた朝のことを・・・

思い出したりしていた。

次男への思いは 和子は ひときわ強かったのである。

そのために 次に生んだ男の子の名前を・・・

一文字違いの 同じ名前にしたのだ。

その子に彼をだぶらせて 思いを寄せることしか できないからだ。

和子はいま その才女の 弘の奥さんらしき人には

恨みも憎しみも 何の悪感情も もってはいない。

なぜなら 3人を養子にした上に

成長するまで きっと 苦労したはずだからである。

立派に育て上げてくれたうえ

世間並み以上の 仕事につけてくれたそうである。

今和子は その女性に 感謝しているのである。

「 立派に育て上げてくれて ありがとう 」 と 言いたいほどである。

世間一般でいうなら 和子のことを

子供たちを手放せるなんて この女はきっと、愛情がないんだ・・・とか

薄情な女だ・・・とか、思うことでしょう。

しかし 愛 とは いつも一緒にいることではありません。

そばにいて 見ていることが・・・愛だとも 限りません。

あの時の和子は 自分の考えでは

「 3人一緒に行かせる 」 ことが 最大の愛である・・・と

そう・・・思ったから・・・自分のことより・・・

子供たちのことを 考えてのことだったのです。

自分さえ 我慢すればいい・・・

自分だけが 哀しみを引き受ければいい・・・

彼らには・・・辛い思いを味あわせたくはない・・・

その心により・・・手放すことを・・・決めたのである。

今 和子は あの時に 福島県の知らない山の中で

神さまが 助けてくれたことを ずっと、忘れないでいる。

子供を道づれに 自殺しないで・・・よかった・・・と

こころから 神さまに 感謝を しているのである。

神さまが助けた人

<http://p.booklog.jp/book/87279>

著者 : maraikajapan

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/maraikajapan/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/87279>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/87279>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ